3）市民性

阪神･淡路大震災を契機として､被災地では自律と連帯に基づく新しい市民意識が生まれ出でようとしている。被災地にくらす人々は、この新しい価値観を市民社会の貴重な資本として認識し育てようとさまざまな形で取り組んできた。ここでは人々の社会生活に関する価値観や行動傾向を問う質問項目から、現在の被災地にくらす人々の市民性を測った。

具体的には､「どちらの考え方がよりあなたのお考えに近いと思われますか。これらはどちらが正解というものではありません。気楽なお気持ちであなたのお考えに近いほうに○をしてください」として、8 項目にわたってたずねた。これらの質問項目は、兵庫県で行われた 1999 年調査の結果より、市民性は「自律（内発的行動基準重視)」と「連帯（協調性重視)」という互いに独立な 2 軸で表されるという仮説が立証されたことを受け、さらに改良を重ねたものである。

回答データからの情報を損なわない形で、回答傾向により質問項目の似ているカテゴリーを探し出し、似通った反応を示す調査対象者を見つけ出す統計的分析手法として、等質性分析を行った。その結果、市民意識に関する回答項目は､「己を大切にする－己を大切にしない」という自律の軸と､「和を大切にする－大切にしない」連帯の軸で構成される４つのグループに分類されることがわかった(図 15)。

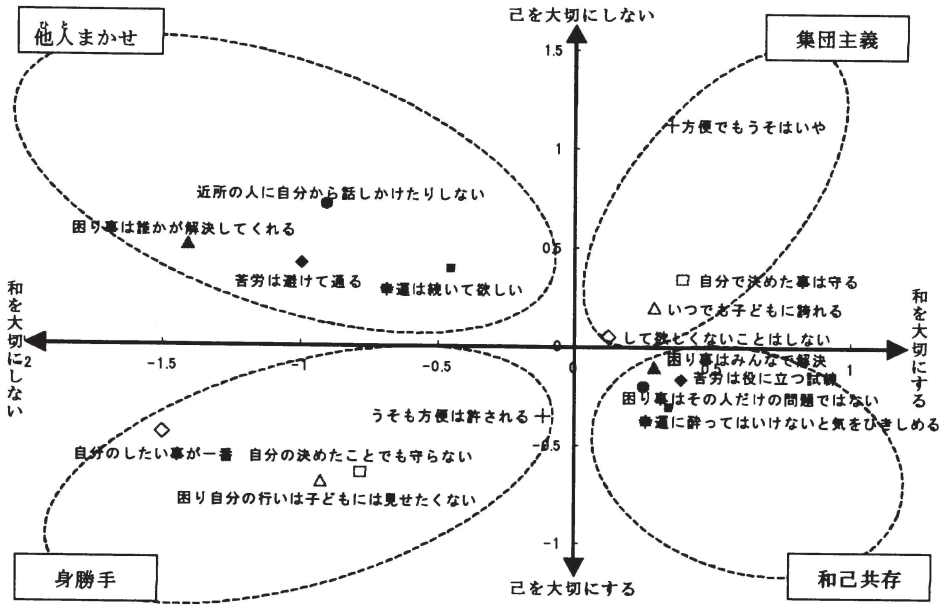

図 15：市民性：等質性分析図（HOMALS）

第一のグループは、人の和は大切にするが自分自身は大切にしないという特徴を示す。本調査では「集団主義」回答群と名付けた。具体的項目としては「たとえ方便でも人にうそをつくのはいやだ」「自分で決めた事は最後まで守る方だ」「いつ子どもに見られても誇れる自分がある」「自分がして欲しくないことは他人にもしない」に回答する傾向があった。

第二は、人の和も自分自身も大切にしないという特徴を示す。本調査では「他人（ひと）まかせ」回答群と名付けた。具体的な項目としては、「用事があっても自分から話しかけたりはしない方だ」「みんなが困っている事でも誰かがうまく解決してくれると思う」「苦労はなるべく避けて通る」「ずっとこの幸運が続いて欲しいと思う」に回答する傾向があった。

第三は、自分自身は大切にするが周りの和を重んじないという特徴を示す。本調査では「身勝手」回答群と名付けた。集団主義とは対照的な態度である。具体的な項目としては、「必要であれば方便としてうそも許されると思う」「自分で決めた事でも守らない事がよくある」「私の日頃の行いは、できれば子どもに見せたくない」「他人がどういおうと、自分のしたいことが一番だ」に回答する傾向があった。

第四が最も市民性が高い回答群であり、自分も大切にし、かつ人々との和も保つ事ができるという特徴を示す。本調査では「和己共存（わこきょうぞん）」と名付けた。具体的な項目としては、「用事があれば、近所の人にも、自分からきっかけをつくって話しかけるほうだ」「みんなが困っていることなら、みんなで考えることで解決の糸口が見えると思う」「苦労は将来役に立つ試練と考える」「この幸運に酔ってはいけないとこころを引き締める」に回答する傾向があった。

では、市民性の高い「和己共存」のグループに属する人々はどんな特徴を持った人々かを次に考察する。

＜属性との関連＞

男女に関わらず、世代が上になるほど己を大切にする（図 16）

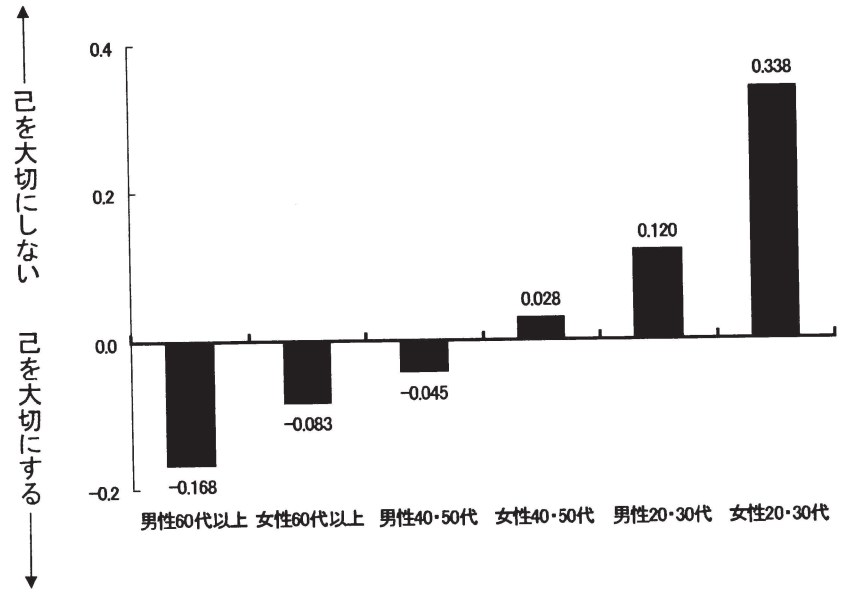

図 16：市民性・自律得点の違い（性・世代別）

中央値を 0 とした自律度得点の平均値

得点が低くなればなるほど、自律度が高い（己を大切にする）

最も己を大切にするのは、60 代以上の男性であった。続いて 60 代以上の女性、40・50 代の男性・女性と続き、20・30 代の若い世代は己を大切にする人が少なかった。とりわけ 20・30 代の女性に自分自身を大切にする人が少なかった。この結果により、市民性の自律の部分は世代と大きな関係があることがわかった。

男女 20・30 代、女性 40・50 代、男性 60 代以上は比較的、和を大切にする人が多い(図 17)

若い世代には、男女を問わず和を大切にする傾向が見られた。女性の 40・50 代では、主婦が 60.5%を占めることから、家族を大事に生活する日々の姿勢が和を大切にするという価値観に現われたと考えられる。60 代以上の男性にも、和を大切にする傾向が見られた。

40・50 代の男性は和を大切にしない人が比較的多かった。この世代の男性の 93.8%が職についており、仕事上のつきあいを中心とした人間関係が、和を大切にする余裕を失わせる結果になっていると思われる。また 60 代以上の女性で最も和を大切にしない人が多かった。これは、16.9%が単身世帯であることが原因ではないかと考えられる。

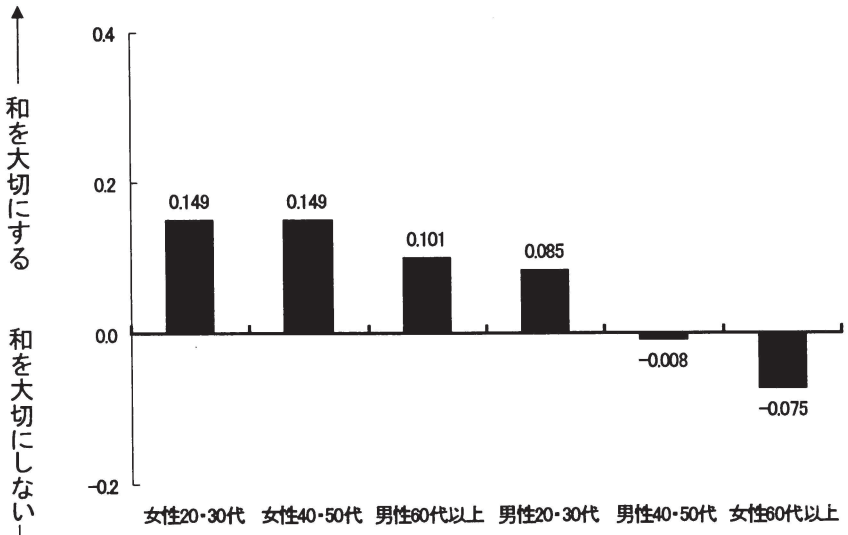

図 17：市民性・連帯得点の違い(性・世代別)

中央値を 0 とした連帯度得点の平均値

得点が高くなればなるほど、連帯度が高い(和を大切にする)

60 代以上の男性が、己も和も大切にすることができ、最も市民性が高い(図 18)

上記の結果を二次元のグラフ上に表すと、男女とも 20・30 代は、己は大切にしないが和を大切にする「集団主義」にグループ分けされた。日本の伝統的価値観である「集団主義」であるが、自分自身の意思を通すより、仲間やグループなどの自分の属する集団の和を大切にする若者の気質が明らかとなる結果となった。40・50 代、60 代以上の女性は、「己を大切にする―己を大切にしない」の軸においては、はっきりした特徴がなかった。むしろ「和を大切にする―和を大切にしない」の軸において、特徴が見られた。60 代以上の女性は、和を大切にしない人が多く、反対に 40・50 代の女性は和を大切にする人が多かった。これは家族人数に密接な関係があり、一人暮らしの人を多く含む 60 代以上の女性と主婦が多く家族人数も多い 40・50 代の女性との差が現われた結果となった。40・50 代の男性は、両軸において中庸な結果となった。

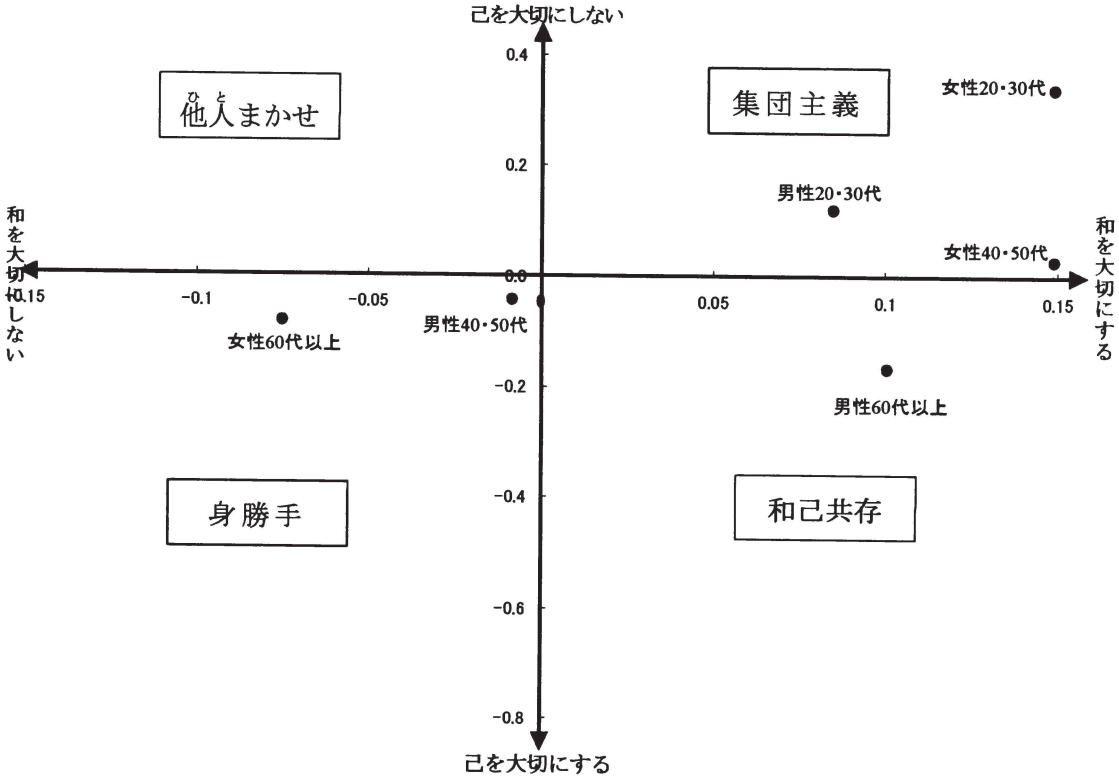

図 18：市民性：等質性分析図（HOMALS）（性･世代別）

＜近所づきあいとの関連＞

和己共存グループに属する人は、近所づきあいを大事にする人たちである(図 19)

市民性と近所づきあい項目との関連において、近所づきあいの項目ごとに、その付き合いの頻度によって、回答者をグループ分けし、二次元グラフ上に各軸の平均点を元に表わした。すると近所づきあいを大事にすると各項目に答えた人は、自分自身も人の和も大切にする和己共存グループにほぼ含まれた。また、近所づきあいは大事にしないと各項目に答えた回答者は、自分自身も人の和も大切にしない「他人（ひと）まかせ」グループに含まれた。このことから、最も市民性の高い和己共存グループの人たちは、近所づきあいを大事にする人たちであることが明らかになった。

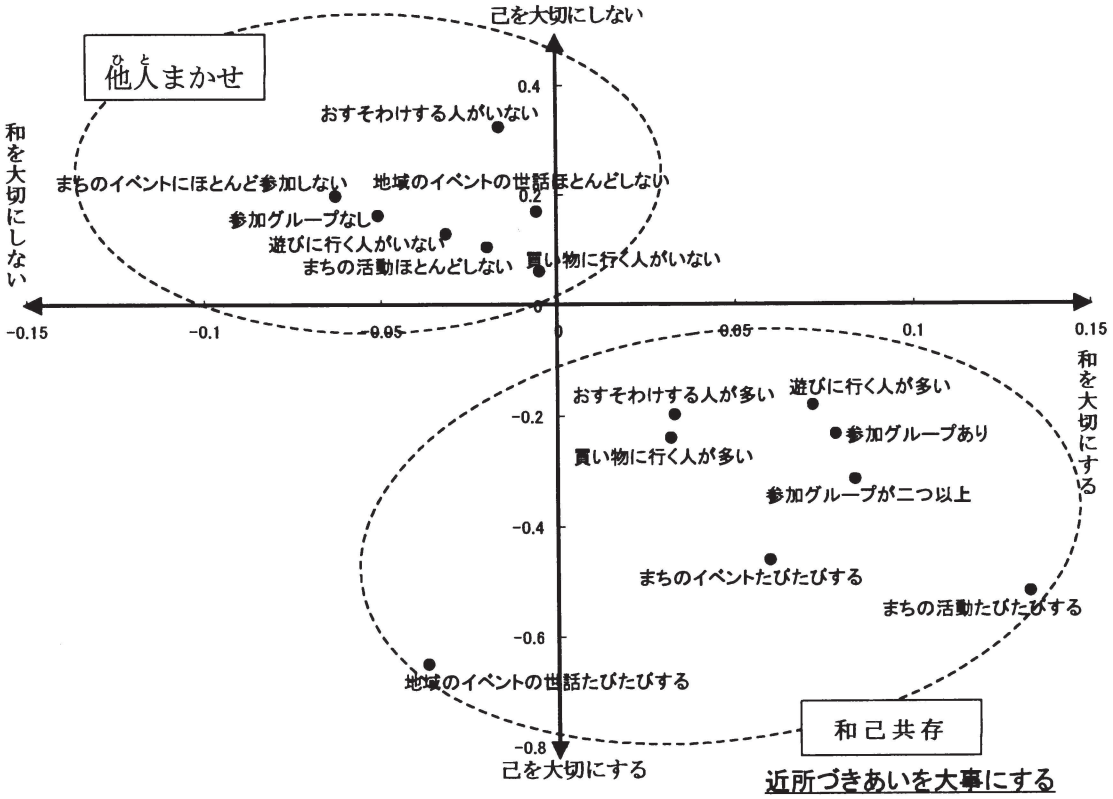

図 19：市民性：等質性分析図（HOMALS）（近所づきあいの程度別）